

令和5年度自己評価シート(年度末評価)

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	<input checked="" type="checkbox"/> 全・定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	------------	-----	----------------	------	-------	---	---

1 中期(3年間)経営目標及び短期(本年度)経営目標

【中期(3年間)経営目標】 (1) 国際バカロレア教育 (IB プログラム) を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校の教育目標の達成を目指す。	評価			総合評価
	1年目	2年目	3年目	
	B	A	A	A
【短期(本年度)経営目標】 IB プログラムを導入した本校のアイデンティティが具現化した姿を、生徒、保護者、教職員それぞれが、交流等を通して目指す学校の姿を自らの言葉で表現するとともに、自らが関与した行動や活動について、その目的や内容を説明することができる。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価 (生徒・保護者・教職員対象 4段階)	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	3.1	3.1	3.1	A
【短期(本年度)経営目標】 日本の学習指導要領と IB プログラムを融合させた指導と学習の充実を図るために、学校の示す方向性を基に、IB 推進チームと教科会の間で適切なコミュニケーションを行うなどして、校内組織の活性化が図られている。				
【評価指標】 教職員対象アンケート、実績値等	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	90%	90%	90%	A
【短期(本年度)経営目標】 校外の様々な人的・物的資源を活用したプログラムの実施により、IB プログラムの充実が図られている。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた評価 (校外関係者からのフィードバックを対象 4段階)	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	—	3.0	—	B

2 年度末評価のまとめ

評価結果 の分析	中期(3年間)経営目標	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・MYP 及び DP 認定校として、各プログラムの接続を意識した教育活動を展開することができた。また、教育目標達成のために、授業だけでなく、生徒会活動等の特別活動や寮生活における様々な場面を通して、本校ミッション・ビジョン・バリューの達成に向けて目指すべき生徒像を共有することができた。 ・IB の学びと生徒のキャリア形成を結びつける本校の進路指導体制を整備することができた。
		課題	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度 MYP 及び DP を通した 6 年間のプログラムが完成する。IB プログラムを修了する生徒の進路保障とともに、各プログラムの更なる充実と、中高一貫教育校である強みを生かした本校ならではの独自性を追求していく必要がある。
	短期(本年度)経営目標	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・MYP チームと DP チームを軸とした各教科での IB 推進を図ることができた。また、国内 IB 校との情報交換や学校視察の受け入れを通して、本校の目指すべき IB 校としての方向性を考え続けることができた。 ・IBDP を活用した生徒の進路実現に向けて、国内外の大学訪問や、各種奨学金団体を含め関係機関の担当者との連携を進めることができた。
		課題	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の授業実践が学校全体の IB 推進にどう貢献しているのか、見直しをもって指針を示す必要がある。 ・年間の重点目標や目標達成のために必要なステップやプロセスの周知徹底の仕方をブラッシュアップしたい。 ・IBDP を活用した進路実現を図るために必要な情報について、情報の量や質のさらなる充実が必要である。
今後の改善方針			<ul style="list-style-type: none"> ・今後迎える IB 認定校評価訪問を学校が発展するための前向きな機会と捉え、目的・環境・文化・学習の側面から、全教職員が IB 校としての理念を共有し、本校がどうあるべきか、IB 生をどう支えるかを考えていく体制を整備する。 ・個々の教員が各自取り組める部分で、既存の概念にとらわれずアグレッシブに単元計画を見直し授業改善を行い、日本の学習指導要領と IB プログラムを融合させた指導と学習を更に充実させ、IB プログラムの更なる発展を目指す。 ・生徒が IB の学びと生徒のキャリア形成を結びつけるために必要な情報提供を、戦略をもって組織的に進める。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方針			<ul style="list-style-type: none"> ・完成年度を迎えるにあたり、卒業時に 6 年間のアカデミックライフをどう振り返り、他の IB 校とは違う HiGA 生らしさや自分らしさをどう捉える IB 生の育成を目指すのか、組織体制を整えつつ、個々の教職員が互いにクリティカルかつクリエイティブに理念を共有していく。

令和5年度自己評価シート(年度末評価)

校番	202 127	学校名	広島観智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	全・定・通	本・分
----	------------	-----	----------------	------	-------	-------	-----

1 中期(3年間)経営目標及び短期(本年度)経営目標

【中期(3年間)経営目標】 (2) 教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する。	評価			総合評価
	1年目	2年目	3年目	
	A	B	B	B
【短期(本年度)経営目標】 授業での学習活動、見通しを持って粘り強く取り組み、その学習をまとめ、振り返って次につなげたり、仲間や地域の方々との対話や協働を通じて考えを広げたり深めたりすることができる。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価 (生徒・教職員対象 4段階)	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	3.1	3.2	3.1	B
【短期(本年度)経営目標】 正解が存在しない実社会の問いに生徒が向き合い、その課題解決に向けて収集・精査した情報を基に、授業で身に付けた知識・技能を活用して、自らの考えを形成し他者に表現できる、MYPの4年間を見通したプログラムを開発し、それを実践・検証する。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価 (教員対象 4段階)	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	3.2	3.2	3.3	A
【短期(本年度)経営目標】 教員一人一人が「教科横断的で探究的な授業づくり」を行うために必要な研修プログラムの開発を推進するとともに効果的な指導方法や教材開発の共有化を図る。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価 (教員対象 4段階)	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	3.0	3.0	3.1	A

2 年度末評価のまとめ

評価結果 の分析	中期 3年間 経営目 標	成果	<ul style="list-style-type: none"> ATL (学習の方法) や ATT (指導のアプローチ) を年間の研究目標に据えて、授業交流や研究授業を実践することができた。単元計画や指導計画の作成を通して、逆向き設計型の授業デザインを各教科で展開し、どの教科においても探究的な授業づくりを協働的に設計することができた。
		課題	<ul style="list-style-type: none"> 主体的・対話的な授業を展開する中で、より深い学びにつなげていくための仕掛けを求めたい。 MYPにおけるPP (パーソナルプロジェクト) やDPにおけるCAS (クリエイティビティ、アクティビティ、サービス) の取組状況を整理し、生徒がよりダイナミックに探究的な学びを進める体制を整える必要がある。
	短期 本年度 経営目 標	成果	<ul style="list-style-type: none"> 評価規準及び総括的評価課題を単元の最初に説明することで、生徒は目指すべき単元のゴールをイメージすることができている。また、評価規準をもとに自身の学習の到達度を図ることで、見通しを持って粘り強く取り組み、その学習をまとめ、振り返ることができている。 中学生のインターンシップ実施や、高校生のCAS活動、EE(課題論文)のリサーチにおいて、島内企業に支援をいただきながら、生徒は探究を進めることができた。 G7 広島サミット開催国へのレガシープロジェクト派遣を含め、広島サミットに関連して企画された国内外のプロジェクトへの参加や、各種産学官国際会議等への出席等を通して、生徒は正解が存在しない実社会の問いに向き合い、課題解決に向かう資質・能力を身に付けつつある。 2期生のPPの学年平均は4.52で、世界平均比+0.62であった。
		課題	<ul style="list-style-type: none"> 資質・能力の定着の程度や、生活様式・文化的背景が多様な生徒一人ひとりの個に応じた指導に課題がある。 1期生のEE(課題論文)やTOK(知の理論)エッセイの完成に向けて指導体制を整えるとともに、2期生以降の指導体制のバージョンアップを図る必要がある。
今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> 教員の授業力向上のために教科内での目標設定(年間目標の設定)を行ったり、効果的な授業実践を交流できる場を教員研修等の機会を活用し創出する。とりわけ、学習スタイルや学習進度の異なる生徒への個別最適なアプローチをしながらインクルーシブな教育活動を推進する。 各授業での探究的な学びやSA、CAS、PP、EE、TOKへ取り組む中で、生徒は主体的に外部の様々なプログラムにも参加しながら、「自分とは何か」「自分の探究したい研究領域は何か」という問いを自らに投げかけている。今後、生徒がIBDPを活用して国内外の大学へ進学する際、一人ひとりの生徒がこうした問いをパーソナルステイトメントにしっかりまとめ、進路実現に向かえるよう、持続可能な進路支援体制を整えていく。 		
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の教科横断的で探究的な学びを進める基盤はできつつある。「パーソナルケア」の視点を持って、生徒一人ひとりの特性をしっかりと見極め、引き出しながら、PP、EE、TOK、進路等の支援をし、ダイナミックな探究心や挑戦心をもち、よりよい社会に貢献できる人材を育てていく。 		

令和5年度自己評価シート(年度末評価)

校番	202 127	学校名	広島観智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	<input checked="" type="checkbox"/> 定 通	<input checked="" type="checkbox"/> 分
----	------------	-----	----------------	------	-------	---	---------------------------------------

1 中期(3年間)経営目標及び短期(本年度)経営目標

【中期(3年間)経営目標】 (3) 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める。	評価			総合評価 B
	1年目	2年目	3年目	
	A	A	B	
【短期(本年度)経営目標】 集団への所属感や連帯感を深め、集団の構成者であることを自覚し、人と人との触れ合いやつながりを深めていくことができるようにする。				
【評価指標】 生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	前年度 現状値 89%	本年度		評価 B
		目標値	実績値	
		95%	91%	
【短期(本年度)経営目標】 生徒一人一人が、寮生活におけるきまりを厳守し、主体的に規律ある生活を通して、安心して充実した寮生活を送れていると感じることができるようにする。				
【評価指標】 生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	前年度 現状値 93%	本年度		評価 B
		目標値	実績値	
		95%	91%	
【短期(本年度)経営目標】 生徒一人一人が、自己の健全な生活を実現するために、食に関する意識を高め、望ましい食習慣を身に付けている。				
【評価指標】 生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	前年度 現状値 84%	本年度		評価 B
		目標値	実績値	
		88%	85%	

2 年度末評価のまとめ

評価結果 の分析	中期(3年間) 経営目標	成果	・学年を越えた共同生活の中で、互いにコミュニケーションを取りながら、現状の課題を捉え、より良い学校生活や寮生活を送るための方策を模索する過程を通して、他者を尊重する力、困難な状況でも乗り越えようとする力が生徒一人一人に身に付けてきている。
		課題	・中高一貫という特徴を最大限活用し切ることがまだできていない。学習面・生活面共に、高校生がロールモデルとなって将来のリーダーを育成していくような仕掛けを考えていきたい。
	短期(本年度)経営目標	成果	・生徒の自治的な活動の充実を目指し、中高通した体系的な委員会活動の整理を行なった。ユニットリーダーを中心として、それぞれのユニット毎で現状の課題に向き合い、話し合いながらより良い寮生活につなげていくための自身の行動を考えることができるようになってきている。 ・日頃の給食指導や委員会活動により、食事マナーの定着・継続に繋いだ。また、献立に海外や日本の郷土料理等を積極的に取り入れ、諸外国の食文化や日本の伝統的な食文化への興味・関心を高めることができた。 ・朝食の一部セルフサービス導入は、生徒自身の食生活に対する意識を大きく向上させる要因となった。
		課題	・多くの生徒がきまりを意識しながら安全で安心な生活を送ることができている一方で、自分本位な行動や、他者を思いやることのできていない行動もやや見られるのが課題である。 ・食品ロスへの興味・関心がある一方で、残食率も依然として高い。成長期にある生徒自身が望ましい生活習慣を身につけるための支援方法の検討と、献立内容の工夫や改善を、業者と連携し継続して行う必要がある。
今後の改善方針		・生徒会やユニットリーダーを中心に、生徒自らが校則や寮のきまりが設定されている意味を今一度考え、自分たちの行動を振り返り、安全・安心で自治的な生活に必要な規程の改訂・改良に取り組む機会を設定する。 ・心身の健康を維持するために必要な「運動・睡眠・食事」のバランスの取れた生活を実現するための支援を、関係分掌等での取組や生徒の委員会活動等の指導を通じて、多角的な視点から推進していく。	
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方針		・寮生活においては、国内外問わず、生まれ育った生活文化の違いによるミスコミュニケーションは常に起こりうる。その負の側面だけに注目するのではなく、新しい校風・文化の創造に繋げるために、うまくその機会を活用する視点をもって生徒支援していく。	

令和5年度自己評価シート(年度末評価)

校番	202 127	学校名	広島観智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	<input checked="" type="checkbox"/> 全・定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	------------	-----	----------------	------	-------	---	---

1 中期(3年間)経営目標及び短期(本年度)経営目標

【中期(3年間)経営目標】	評価			総合評価
	1年目	2年目	3年目	
教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。				
【評価指標】 業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合	前年度 現状値	本年度		評価
	92%	目標値	実績値	
【短期(本年度)経営目標】 教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を縮減している。				
【評価指標】 一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合	前年度 現状値	本年度		評価
	82%	目標値	実績値	
【短期(本年度)経営目標】 教職員に対して、全体・学年・分掌において、形態を工夫しながら、働き方改革に関する研修を実施している。				
【評価指標】 各学年・分掌において、年間2回研修を実施する。	前年度 現状値	本年度		評価
	16回	目標値	実績値	

2 年度末評価のまとめ

評価結果の分析	中期(3年間)経営目標	成果			
		課題			
評価結果の分析	短期(本年度)経営目標	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・勤務時間については、教職員がそれぞれタイムマネジメントを意識し、在校時間縮減に向けて意識統一をすするため、個人の勤務時間管理表の提示回数増加と、全体の時間外勤務状況の「見える化」を図った。目標値には至らなかったが、昨年度実績及び中間評価時の実績に比して、数値の向上が見られた。 ・高校学校の進路指導体制強化のため、DPが2学年で動き始める前のタイミングで、校務分掌・学年分担の見直しをし、新体制での業務遂行を始めている。 ・併せて、ICT活用の更なる推進により、担任業務等の効率化を図ることができている。 		
		課題	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校では「子どもと向き合う時間の確保ができている」の回答は100%であったが、高等学校においては、新体制への移行に伴い、DP生へ向き合う時間の確保には繋がったものの、DPの高度な学習内容に係る教材研究に莫大な時間を割いている現実がある。さらに、業務分担の偏りは大きく残されており、持続可能な組織体制の構築が必要である。 		
今後の改善方針		<ul style="list-style-type: none"> ・来年度高等学校が3学年となり、DP模擬試験、最終試験及び大学出願等が開始することで、学校全体の業務量の増加は不可避である。中高6年間のIB推進に係る教育活動と学校行事や特別活動の内容・実施時期について検討を継続する中で、業務の平準化を図っていく。 ・本校は「学びの改革を先導する学校」として常に新しいことにチャレンジする学校であり続ける使命を持つ。既存の教育活動や業務遂行のあり方を今一度クリティカルに見直すとともに、今後、高い英語力を有しグローバルな視野で創造的・主体的に学びに向かう生徒の育成のためにも、外部リソースの積極的かつ有効的な活用を検討していく。 			
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方針		<ul style="list-style-type: none"> ・働き方改革については、業務量の増加にも関わらず、他校に共有できる仕組が確立されつつある。来年度完成年度で教職員定数がほぼ確定され、業務量の相対量の見込みもたつことから、長期短期の外部リソースの活用も含め、教職員の業務分担の平準化を定期的に進める。 			